日韓 奔流半世紀

共につくる

上 中 下

やっと向き合った 次は

4月。札幌の姉妹都市である韓国・大田市の小劇場に、劇団札幌座プロデューサー平田修二(68)の姿があった。札幌座の作品として初めて韓国でリメークされた「亀、もしくは…。」の上演に駆けつけた。

札幌座の韓国公演や俳優招請などを進めてきた平田にとって15度目の訪韓だ。「共につくることで互いが進歩し、新しい関係が生まれる。小さな協力を積み重ねていきたい」と話す。

札幌座に限らず、日韓演劇界の共同制作は着実に増えている。

韓国・大田市の劇団員らに歓迎される平田修二（後列左から2人目）＝松本創一撮影

昨年、ソウルで韓国の役者12人と舞台をつくった劇作家の野田秀樹は、現地での会見で両国関係の悪化について問われると、表情を曇らせつつ言い切った。「演劇は政治より古くて強い。一時的な政治の対立があっても、現場ではそういうことと無縁で、韓国人俳優と共に芝居をつくりたい」

日韓の文化交流は1965年の国交正常化後、順調に広がってきたわけではない。

好き嫌い言う関係

韓国が90年代末まで続けた日本の大衆文化禁止政策は、まさに国交正常化が契機だった。北大准教授の金成玟（東アジアメディア研究）によると、日韓基本条約に対し「植民地支配の清算が不十分だ」との激しい反対運動にさらされた朴正熙政権が「親日的」イメージを打ち消すため、日本の大衆文化に門を閉ざした。

それ以来「植民地時代の記憶を呼び起こす」との理由で、音楽や映画の放送や上映を禁じる政策が引き継がれた。演劇は「大衆文化」の枠から外れ、70年代から日本の舞台公演が認められた。

大衆文化の開放は98年、大統領に就任したばかりの金大中が決断した。

韓国の業界が警戒したほど、日本の映画はヒットしなかったが、逆にこのころから韓国の文化が「韓流」として日本に流れ込んだ。大衆文化開放を契機として今世紀に入り、互いの文化に急速に触れ合ってきた。

北大准教授の金は、日本を過剰に意識してきた韓国と、韓国に無関心だった日本という「一度もともに向き合うことなく20世紀を過ごした隣国の出会い」だったとみる。

いま日本の韓流ブームは下火となり嫌韓論も広がる。金は「時代の流れとともに、両国は好き、嫌いをはっきり言える新しい関係に入った。問われるのは、生産的に向き合い続けること」と指摘する。

若い世代の視点で

北海道演劇財団のプロデューサー木村典子(51)は97年に旭川からソウルに渡り、日本と韓国の演劇交流を支えた。昨夏、17年半ぶりに北海道へ戻ってきた。後ろ髪を引かれたが「日韓演劇の橋渡し役を、そろそろ後輩たちに引き継ぐ時」と踏ん切りをつけた。

「私たちだとどうしても植民地時代の遺産を背負った演劇になる。けれど、両国の若い世代には格差社会で必死に生きている共通点だとか新たな視点があるはず。そこに期待したい」

韓国に渡ったころから木村は同じ言葉を繰り返してきた。「日韓の共同作業を普通のことにしたい。いつまでも『交流』じゃだめ」

演劇はそろそろ「交流」ではなくなっただろうか。

「舞台を一緒に何本か手がけた程度では、まだまだです」

思いは次代に託す。＝敬称略＝

歴史と語る

一撃されない限り、武力を使